

琉球の服装について —伊平屋島の海神祭の服装—

○ 琉球大教育 渡口 文子

大谷女短大被服 橋本十栄子

目的 伊平屋島は与論島に隣接し、沖縄県の最北端に位置する。

オ1、オ2 尚王統の發祥地と伝えられ、古式を継承する祭祀が今尚行なわれている。その祭祀を行なう神女達の服装と、同一文化圏の神女の服装を比較検討し、琉球の服装を体系づける事を目的としている。

方法 昭和58年8月に行なわれた伊平屋島の海神祭の実態及び神女の服装の形態、着装等の面から調査を行ない、他地域の神女との相違について考察を加えた。

結果 古琉球時代より伊平屋島は、伊是名島を包含していたが、近年の行政上では、伊平屋村、伊是名村と区分され、それぞれ島独自の祭祀を行なっている。

伊平屋村では旧暦7月17日に海神祭が、18日にシヌグカが行なわれている。島の過疎化が著しい現状であるが、海神祭当日には多くの門中達も歸島し、祝女を中心に神女達が古式豊かな祭祀を行なっている。

本島北部の回頭村比地、大宜味村盛屋、今帰仁村古宇利島の海神祭や本部町備瀬大折目の神女の服装と比較して、神サージの被り方、ハブイに違が認められた。然し神衣裳は白色を基本としてはいるが、形態そのものには他地域との相違が認められなかった。